
親友、その次は？

タチクラミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友、その次は？

【Nコード】

N8063L

【作者名】

タチクラミ

【あらすじ】

ある日を境に慧はいなくなった……親友の俺にさえ何も言わずに。
だから俺は探そうと決心した。
だが見つけた時にまさかあんなことになってるとは、想像だになかった。

まさか慧が女になってるなんて（笑）

この小説はギャグよりになりますが、最初は少しシリアスになる予定です。

当たり前がずっと続く訳じゃない(前書き)

やっちゃまった(汗)

不本意にも伝説となった魔女の更新速度が半端なく遅くなってるのに新シリーズ始めてしまった。

こっちは文芸部で最近書いてる小説で、自分の更新速度を著しく下げてる要因です。

なんかせっかく書いたのに何もしないのは時間的な問題で、もったいないので投稿します。

不定期更新です。

当たり前がずっと続く訳じゃない

「ん？どうした、腹、痛いのか？」

「そう……なのかな？なんかお腹に違和感があつてさ」

「おいおい。サッカー部のエース様が体調管理ぐらいできなくてどうする」

「僕と拓馬たくま二人合わせて、でしょ？それにこれくらい何でもないよ」

「無理してやがるな、慧けい？またズボンを右手で掴んでる。幼馴染の俺を欺きたいならまずはその癖をどうにかするんだな。わかったらさっさと帰れ」

「……やっぱり騙されてくれないか。仕方ない、じゃあお言葉に甘えて今日は帰るよ」

「ああ。気をつけて帰れよ。お前は声変わりしていないうえ、ぱつと見美少女にしか見えないんだからな」

「なっ！そこは普通慰めるところでしょ！！何で人が気にしてること言つかなあ！？」

「ククツ。それだけ叫べればすぐ元気になるだろ。……だからそう不安そうな顔をするな」

「~~~~~っ！！！帰るっ！！」

「早く元気になれよ。みんなが心配する。もちろん俺もだ」

「……………うん。また、ね」

「おう、またな」

中学生の春。

夕日が差し込む教室での何気ない会話。いつまでも続くと思っていた日常。

このときの俺は、次があることを疑いもしなかった。

だから慧が入院したと知った時も、面会できないと知った時も何もせず、命に別状がないのなら、と慧のいない非日常を過ごしていた。

それが俺と慧に大きな溝を作っていることに気付きもせず。次なんて二度とないことに気付きもせず。

馬鹿な俺は、全てが手遅れになって初めて自分の考えの甘さを知った。

その代償は、慧の転校及び転居というあまりにも残酷なものだったが。

~~~~~

あの教室での会話以来、俺はただの一度も慧に会うことはできていない。

担任に土下座する勢いで頼み込み、慧と俺の中の良さを知っていた担任が住んでいる土地だけ教えてくれたが、何度足を運んでも慧の影さえ見つけることは出来なかった。

当たり前だ。手がかりなんて何一つないのだから。

それでも俺は、何度も何度も足を運び慧を探し続けた。

以前、友人になぜそうまで焦るのか、と聞かれたことがある。

その時初めて俺は、俺が焦っていることに気がついたのだ。

それまで俺は言いようのない不安に突き動かされていただけだったのだが、考えてみるとそれは焦るといふ感情に他ならなかった。

俺は焦っていた、何も言わなかった慧に。

いや違う。

何も言えなかった慧に、だ。

何故こういえるのか。

それは慧が俺に何も言わずに去っていくなんてありえないことだからだ。

これはけして自惚れではない。

そう言えるほど、俺と慧の共に過ごした時間は長く濃密なのだ。

なのに、何も言わずに去っていった。  
なら何も言えなかったと考えるのが妥当だ。

……理由は、分かっている。

転校してしまうほどのことなのだ。面と向かって話したいにきまってる。

でも、俺は会いに来なかった。

面会謝絶なんて言い訳にもならない。

会おうと思えばいくらでも方法はあったのだ。

あいつが一番辛い時に一緒にいてやることもできたのだ。

だが、俺は何もしなかった。

結果、慧は何も言えずに去るしかなかった。

そう考えたから俺は焦っている。

言えないほどのことなのだ。

慧からの接触はまずないと考えていい。

だからこそ俺が会いに行かなければならない。

もちろんすべては想像にすぎない。

慧は本当に二度と俺に会うつもりがないのかもしれない。

だが、それがどうした。

あいつはまたね、と言った。

それだけで会いに行く理由は十分だ。

あいつが困るうとも知ったことではない。

俺は俺のために会いに行く。

生憎俺はあきらめが悪いんでね。

たった半年探した程度で、はいそうですかって引き下がれるか。

それにこの半年まったく成果がなかったわけじゃない。

あいつの学力で行きそうな高校は見つかった。

俺には少し辛いかも知れんが、合格圏内だ。

さあ待っている、**慧**。  
必ず見つけてだしてやる。

現実  
は意外と都合がいい(前書き)

更新が遅すぎですね…

次話をもっと早く更新できるように頑張ります!!

展開はかなり早いです。

## 現実とは意外と都合がいい

「うがぁあ~~~~」

早くも挫折の予感。

受験？

合格はしたさ。

でも慧がいるかどうかは別問題。

そもそも最初に俺はいる可能性と云っていたはずなのに、言い続けているうちにいつの間にか合格すれば慧がいるに変わってたのに気がついたのは入学してから。

はい、遅すぎです。

焦った俺は急いで男子の欄から如月慧の名前を探したがもちろん見つからない。そうそう現実には都合よくない。

見落としてないかって？

ないな、うん。

何故自信満々なのかって？

今の俺は出席番号順に全クラスの男子の名前を言えるんだぞ？

これで見落としていたら俺の目は節穴以下だ。

……偉そうに言ってますが無論強がりです。

これで完全に手掛かりは断たれたわけなんだから、文句ぐらいは言わせて欲しい。

はぁ……また別のアプローチの仕方を考えるか……

俺は思考に没入しかけて

「おっ、拓馬がついに壊れたか？」

不意に戻された。

「んなわけねえだろ。後にも先にもそんな予定はない。ってかつい  
にってなんだよついって」

「わからねえのか？お前の変人っぷりはこのクラス公認だからな。」

「~~~~~」

まだ何か言っているが無視をする。馬鹿に付き合ってるほど俺は暇  
じゃないんだ。

ちなみに俺が変人という不名誉な認識をされている理由は入学式に  
気がついて焦った俺がクラスメイト全員に慧の事を知らないかって  
聞いた結果である。

今は反省している……

もっと他にやり方があっただろうに。

それだけの犠牲を払っていながらなんの情報も得られなかった。  
振り出しに戻るってか？

上等、前回みたいにエリアを絞って歩き回るか。

それとも張り紙でも作ってやろうか？

街中で聞き込みをするのも一興。

苦勞すれば苦勞するほど見つけた時の感慨はひとしおだからな。

「~~~~~」って聞いてんのか拓馬！

「うおっ！すまん聞いてなかった」

どうせどうでもいいことだからな。

そんな心の声は置いといて。

「ったく……今度は聞いてるよ。なんとこのクラスに入学式すら来  
てなかった複学生が来るのだ！」

「……それは複学生って呼んでいいのか？」

「冷めてんなあ。美少女だぜ美少女！俺がこの目で見たから間違  
ない！」

美少女って言ってもな……。俺はそこらへんの美少女よりはるかに可愛い男を知ってるからさ……。色々複雑なわけよ。着替えの時、毎回無駄に色気があったからな。

馬鹿なことを考えていると担任が教室に入ってきた。

「おおーい。HR始めるぞおってその前に複学生を紹介しよう。男子諸君喜べ！とびっきりの美少女だ！！」

「「「うおおー」」」

おい教師、それでいいのか。その発言微妙に問題ないか？

「さあ入ってくるがいい！」

「失礼します」

「……なっ！？」

ドアを開け入ってきた人物を認識した時思わず声をあげてしまった。

だがそれは始めてみるクラスメイトの登場に沸き立つ教室の歓声にかき消された。

「~~~~~！」

「~~~~~！」

「~~~~~！」

様々な声が飛び交うが今の俺はそれが意味ある言葉として聞こえなくなっていた。

その声をものともせず俺の意識を根こそぎ奪っていった人物は平然と教壇の前に立った。

俺にはもうそいつしか見えなくなっていた。

仕方ないだろ、この半年常に探していたんだ。もし何も感じなかったらそれこそ変だ。

「……お前はいなくなる時も現われる時も突然なんだな」

そう愚痴る俺の顔には確かな笑みが張り付いていた。

そう複学生としてやってきたのは俺の親友 如月慧だったのだ。

俺は喜びのまま慧の名前を叫びそうになり、はたと気づく。

何かおかしい。

俺はこの学校に入学する男子の名前はすべて覚えている。

なのに慧の名前はどこにもなかった。

転校性ならそれでおかしくない。が、慧は複学生だ。

入学式に参加していなくても記録ぐらいはあるはずだ。

それにさっき担任は何て言った？

慧は見た目は完全に美少女だ。女と間違われぬことは一度もない。

だが、それを担任がするか？

ちゃんとした資料を持っている担任が。

なにより今教壇の前に立っている人物はこの学校指定の女子の制服を着ている。

慧は姿こそ美少女だが立派な男だ。

それでも、他人というには似すぎている。

そこまで思考が至ったところで慧(?)が自己紹介を開始した。

「私は東雲京しのめきょうと言います。皆様に最初で最後のお願いをします。

どうか私に関わらないでください」

しん

教室は水を打ったように静かになった。

クラスメイトが口々に「え？冗談だよな？」などと囁き合っている。混乱しているのだろう、突然そんなことを言われて。

俺は別の意味で混乱していた。

もしかしたら慧かもってという期待をしていなかったわけじゃないが、混乱している理由は……いや、まさにそれが理由だろう。

まずは東雲という苗字についてだ。東雲の苗字は慧の母親の旧姓にあたる。

そして、京という名前。京という漢字は「けい」とも読める。名前を変えるにはあまりにもお粗末。

俺はこの時点ではある程度確信をしていたが、それでも性別の差というのは絶対的な確信を持つには大きかった。

それもすぐに関係がなくなつたが。

「ああ〜、東雲はこういう奴だが仲良くしてやってくれ。特に女子。同じ女同士なんだからすぐに仲良くなれるだろ。東雲は後ろに空いてる席があるからそこ座つといて。ではHRを始めます。〜」

俺はこの時目線が東雲の手元に固定されていた。正確にはスカート  
の裾を握りしめている右手に。

……その姿はあの日の慧とひどくかぶつた。

そして確信した。

東雲は席を移動している時に俺を見て一瞬だけ表情を変えたのだ。それはある程度親しい人でも分からないほどの微妙な変化だったが俺は見逃さなかつた。

親友の俺をそんなにわか仕込みのポーカーフェイスで欺けると思っ  
なよ？

なにがあつたかも、どうして女子の制服を着ているのかもわからない

いがこれだけは言える。

東雲京は如月慧だ。

意外と都合がいいな、現実も。

幸か不幸かあの自己紹介のおかげで慧の周りには誰もいなく近づくことも容易だ。

ガタンッ

俺は存在を主張するように音を立てて立ち上がった。

そのまま慧のもとに向かう。

周りから勇者だ、なんだと囃されるが気にしない。

教室はそこまで広くなくすぐに慧の机の前についた。

慧はやはり身内にしか分からないような微妙な表情の変化で反応した。

すぐに平静を装い口を開いた。

「……関わらないでください、と言ったはずですが？」

俺はその言葉を聞きもせず目の前の馬鹿にのみ聞こえるように小声で言う。

「（……今ここで事情を話すか、今から校舎裏に来るか選べ、なあ慧？）」

今度こそ本当に表情を変えた。

先ほどまでのように身内にしか分からないような微細な変化ではな

くしっかりと。

俺は答えを聞かずすぐに教室を出た。

答えなんて分かりきっているからな。

俺は何故か勝ち誇ったような気分になった。

クラスメイトは表情を変えた東雲と勝ち誇っているような笑顔で去っていく拓馬を見て、ひたすら疑問符を浮かべていた。

そうそう簡単にはいかない(前書き)

テストが終わったので更新速度上がります

そうそう簡単にはいかない

「……ちよつと性急すぎたかな」

慧を呼んだ校舎裏で猛烈反省中デス。

京が慧であることに疑いはないのだが、流石にいきなりすぎたもしれん。

来るかどうかも怪しい。

それにあいつ校舎裏なんてわかるのか？

ちよつと浮かれすぎたか。

「ん？空が暗くなってきたか……？」

見上げた空には暗雲が立ちこめていた。

「これは一雨来そうだな」

憂鬱だ。この場所は天井なんてものは当然ない寂れた場所だから雨ざらしになる。

早く来てくれればいいんだが…

~~~~~

しかしそれは杞憂となった。

慧はその後すぐに現れた。

さも不機嫌ですと言わんばかりの雰囲気を持ちながら。

互いに幾秒か見つめあつた後、ややあつて慧が口を開く。

「……何ですか？私は慧なんて名前じゃありませんよ」

じゃあ何で来たんだよ！という俺の内心の突っ込みを押さえつつ、努めて冷静に言葉を紡ぐ。

「嘘をつくな慧……。ネタが割れた嘘ほど滑稽なものはないぞ」

それでも慧は表情を崩さない。

「だから私は慧なんて男じゃありません。私は……。東雲京です。……立派な女です」

どもりつつもそう俺に慧はきっぱりと言い放った。

スカートを力一杯握りしめながら。

ああこいつは本物の馬鹿だ。

気づかれないとでも思っているのか？

「ああ。お前が自分を女と言うならそれでいい。だがな一つ言わせろ。じゃあ何でお前はそんな辛そうなんだよ」

顔をそんなに歪めておいて、絞り出すように女です、はないだろ。

そこで初めて慧に動揺がみられた。

後一押しだ。

「ち、違う！私は辛そうになんか……」

「違うもんか。何年お前の隣にいたと思ってる。……一年も空いてしまったけどその癖が直ってなくてよかった」

その言葉を聞いた慧は素早くスカートを掴んでいた右手を離した。慧はすぐにしまった、と言う顔になったがもう遅い。ばつちりと焦った顔を見させてもらった。それはもう言い訳できなくなる程に。

だが俺はまだ気づいていなかった。

「で、だ。何か言い訳あるか？」

この一年が変えたのは、なにも慧の性別だけじゃない。

「……さい」

慧と俺の関係性、

「何だ？」

そこには大きな、

「うるさいんだよ！裏切り者のくせに！」

大きな溝があることに。

……ポツッ……ポツッ……ポツッポツッ……ザアアアアア

雨が降り始めた。

諦める？その選択肢はない（前書き）

……お久しぶりです皆さん。待っていた人はいないでしょうが、ようやく学校生活も緩やかになり時間も空いたので投稿を再開しようと思います（汗）週一更新を目指します。

諦める？その選択肢はない

あの日僕のすべてが変わった日。

「初潮です」

医者の中から語られた言葉は僕の理解の範疇を越えるものだった。

「は、生理ですか？慧はこんな顔ですが、息子なのですが？」

「落ち着いてください奥さん。まず半陰陽というものを知っていらつしゃいますでしょうか？」

その内容は僕を絶望の淵へ叩きつけるのに十分すぎるほどの威力を持っていた。

男として生きてきた人生は否定され、僕は女として生きる方が苦勞せずに生きられるのだそうだ。

強要はもちろんされなかった。男として生きる道も示された。確かに性機能は女だが、男性ホルモンを打ち続ければ乳房が大きくなることも生理が来ることもなくなる。

「アハツ」

昨日まで当たり前のように感じていたことが、そんな面倒くさいことをしなければできないなんて考えると、嘲笑いがこみ上げてきた。

よく考えて決めてください、と言われ僕とお母さんは診察室を出た。次の人を呼ぶ看護婦さんの声が僕の耳を通り過ぎる。ああ、今は看護師さんか。心底どうでも良い。看護師さんにとって僕が男であるのと女であるのと関係ない。当たり前だけど、人の日常が憎くて仕方がなかった。

家に帰る車の中に会話は無かった。型遅れで排気ガスばかり出す

車のエンジン音だけが静寂の中に響いている。

古びた家に着いた。今の僕にとっては日常の象徴と言っても構わない家に。

僕は一人になりたいと、静かに言っていると返事も待たず自分の部屋へと駆けた。

特に飾り気がない部屋。壁に掛けた男物の制服は、僕を睨んでいるようだった。逃げるようにベッドへ倒れ込む。涙は出ない。ここで泣くと、女々しくて情けない女になってしまう気がしたから。偏見だけ。

「馬鹿げてる……」

吐き捨てるように、そう呟いた。

—————

ザーザーと雨が拓馬の身体を打ちつける。勝手に舞い上がって、自惚れて、調子に乗って、慧を傷つけた。きつと限界ギリギリまですり減らされた慧の心に土足で入り込んで、何も考えずにばらばらに暴れ回って、最低だ、と拓馬は自嘲気味に嘲笑った。

もう、慧は見えない。俺は取り返しのつかない間違いを起こした。何もしなかったことが、取り返しのつかない間違いだった。最低の屑だ。

慧のいる教室に戻りたくなかった。ここからなら、誰にも見つからずに家に帰れる。

どれだけの間雨に打たれただろうか。身体は芯から凍えきり、心はどうしようもなく固まってしまった。

何が悪かった？ 過去の俺か？ 今の俺か？ ーどちらもまだ。足りなかったものは何だ？ 情報か？ 時間か？ ー覚悟だ。このまま他人になるつもりか？ 関わらないでいるつもりか？

――否だ！

馬鹿みたいに雨に打たれながら自問自答を繰り返す。今は東雲京のいる教室に戻りたくない。その一心で。せめて、

・・・

一時的に慧を他人の東雲京と扱う覚悟を決めるために。

落ち込む時間は終わった。拓馬の目は死んでいない。それどころか、猛獣が獲物を狙うようにランランと輝いていた。

バカめ。泣きながら関わるなと言うことは、つまり助けてくれと言ってるようなものじゃないか。

都合の良い想像、妄想の類でも構わない。

迷惑だと罵られようと構わない。

理由も知らされずに、はいそうですかなんて性に合わない。

つか、理不尽だ。

裏切ったとか、あいつが言うのなら裏切ったんだろうけれど、だからどうした。

俺は裏切ったつもりはないし、まだ親友だと思ってる。

だから。

待ってる。

結局はまだ引き摺ってたりする(前書き)

投稿は毎週日曜日

結局はまだ引き摺ってたりする

俺が教室に戻ると、一斉に授業を受けている生徒としている教師が俺を見た。と、同時にギョツとした目に変わる。その中に東雲京はいない。教室にすらない。俺は密かにほつと息をつく。あとはそれらを無然とした表情で受け流すと、何か言いたそうな教師を尻目にさっさと自分の席へと座ってしまった。するとどうだろうか、教師は何事もなかったかのようにまた、異国の言葉をぶつぶつと吐き出した。生徒も幾人かはまだ面白そうにこちらを見ていたが、ほとんどもノートを取る、もしくはケータイをいじるなど各々の作業へと戻っていった。

気だるそうに頬杖をつき時計を見ると、もう一時間目も終わるかという時間。少なくとも俺は三十分以上あそこで立ち尽くしていた計算になる。心に決めた、決心したと言っても悲しいものは悲しいし、まだ時間が欲しいというのも本音だ。策を練らねば………練らねば………ねら……

「……………くま……………拓馬！」

むう、肩が揺すられる、眠い………寝させろ、俺を起こすな………ちっ、しつこい………！

俺は瞼も開けずに口だけ開いた。

「……………俺の眠りを妨げるものは何人たりともゆるさん」

「……………この流川君だよ……………つたく。おい拓馬、今何時かわかるか？」

この声は、前の席の馬鹿か？ 流石馬鹿じゃないか、そんな簡単な質問をするなんて。ついに時計も読めなくなっただのか……………ふん。俺は教師の声が聞こえないことと、喧噪を鑑みて答えを出した。目

「ホントだ」
「お前が」
「ズラすわけがない」
「日は」
「夕日」
「なんで」
「キレる」
「いい」
「よくない」
「先生」
「諦めてる」
「今は」
「放課後」
「キングクリムゾン！」
「スタンド能力じゃない」
「過程を吹き飛ばす！」
「寝てな」
「残念！」
「無念」
「また来週！」
「だが断る！」
「ええ！？」

馬鹿な……！ 私は今、戦慄を感じている！ 今まで馬鹿だ馬鹿だ思っていた馬鹿が、これほどまでに私の言葉についてくるとは！
これでは色んなこと諸々を有擲無擲にする作戦が……！

「で、だ」

敏之の顔が、突然真面目なそれに変わった。喧噪が遠く離れてい

く。夕日はあかく敏之を照らした。

「拓馬……お前東雲さんに何をした？」

「……ああ、楽しい気分が台無しだ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8063/>

親友、その次は？

2011年9月18日15時24分発行